

一人ひとりを大切にする具体的な保育

6

就学に向けて 必要な力

ユリア
愛知県碧南市・へきなん保育園園長

前回の終わりに、「課業」の取り組みについて述べましたが、このことをもう少し詳しく述べてみます。

この「課業」は、ハンガリーの保育で実践されていることで、ハンガリーでは毎日必ず行われています。環境認識・体育・文学・音楽（わらべうた）・描画の5つのことを、基本的に1週間の中で1回行う決まりになっているようです。しかし最近では、1つの領域のことをバラバラに行うのではなく、「統合課業」として複合的に行われることが多いようです。

1 自園のカリキュラムと課業

さて、このことを日本の園で実践しよう

とすると、どうなるのでしょうか。

私の園では、幼児クラスは年長児クラスも、年中・年少児の混合クラスも基本的に週1回課業を行っています。その他の日は今まで実践してきたカリキュラムがあり、毎日何らかの設定保育をしています。絵を描いたり、劇の練習であったり、体育であったり：と、一人ひとりを大切にする具体的な保育に取り組み前から自園のカリキュラムがあり、そのことと課業をどう実践していくのかを、保育現場からの目線で考えて実践しています。

課業を取り入れることが目的ではなく、一人ひとりを大切にする具体的な保育を実践するにはどうしたらいいのかと考えると、その結果、前回でも述べたように、絵画やワークなどは2人とか3人ずつで進めていく方法を見つけ、実践しています。しかし、やはり丁寧にするには物理的に時間がかかり、そんな中で課業をするとすると、保育士に

とってはかなりの工夫とエネルギーが必要です。それでも意図的に、子どもたちが学ぶ機会の一つとして、週に1回は課業の実践をしています。

2 具体的な進め方

課業を進めていく時の視点として、名古屋コグニティブセンターの牧村さんがまとめたものを引用させていただきます。

〈全体の視点〉

- ① テーマに断続性があるか
- ② テーマは計画的に組み立てられているか
- ③ 他の課業、遊びにつながりがあるか
- ④ 自由な遊びの中で、そのテーマが再現できるようなおもちゃや道具、環境設定はされているか
- ⑤ 簡単↓難強い、全体↓細部へと組み立てられているか

〈課業の中身〉

- ① 子どもが主体的に参加できているか
- ② 子どもにとって、その課業が遊びとして捉えられているか
- ③ 感覚器官をフルに使えるような内容になっているか
- ④ 可能な限り実物を使用できているか

- 上・5歳児の遊び
創造性を発揮して遊んでいます
- 下・木登り

子どもたちは自分のできるところまでしか登りません。保育士が見ている時に登る、というルールはあります



- ⑤ 体験と結びつき、活かされているか
- ⑥ 行為や活動が、言語化されているか

このまとめは、実際に課業をしていくうえでとても参考になる基本的なことが示されています。なお、課業について、私は専門家ではないので、詳しくは、サライ美奈著、(公社)全国私立保育連盟保育国際交流運営委員会編『ハンガリーたつぷりあそび就学を見通す保育―一人ひとりを大切に―する具体的な保育』(かもがわ出版、2014年)を参照いただければと思います。

課業を進めていく時の視点として、以上のようなことを述べましたが、何かお気づきになりませんか？

私は、この視点は課業にかかわらず、日々の保育の中で、ぜひ大切にするとよいことだと思います。

私の園では、特別な保育をしているわけではないので、発表会や運動会、作品展、ワークブックなどもあります。こうした以前から継続している設定保育を行うとしても、この視点を持って相対する時、同じ行為でも、子どもたちにとってその質が変わってくると思います。

答えは一つではないので、保育の形は様々ですが、アプローチの仕方によって、一人ひとりを丁寧に見ながらの実践になり、



変わってくると思います。多分このことは、プロジェクト型の保育や、イタリアのレッジョ・エミリアの保育を取り入れた保育などをしていたとしても、同じことがいえるのではないかと思います。

3 就学に向けて必要な力も育つ

現場の保育士が実践していく中で気づいたことですが、取り組み始めて3年ほどした頃でしょうか、作品展の作品が発するエネルギーが違うように感じたのです。

当たり前といえば当たり前でしょうか。やらされて作った作品ではなく、おもしろくてどんどん作った作品なので、当然そのパワーが違ってくるのです。遊びと同じで、おもしろいからどんどん作っていく活動になっているということですね。

また運動会についても、子どもたちの姿が素晴らしいことに感動してしまうようになってきたのです。

平成23年に園庭を緑化しました。それまで、運動会では演技ごとにいっぱい白線を引いて、一生懸命に指導していました。

「緑化に伴って、白線を引かなくてもいいんじゃない」という話になり、職員たちは「え、



線引かないんですか」といっていたのですが、子どもたちは見事にできるんですね。そして度々述べていますが、話が聞けるので、開会式、閉会式なども素晴らしくすぐにできてしまうのです。主任が以前の運動会のビデオを見たら、「先生たちは厳しい表情で、子どもたちに厳しく指導していたのですが、その時の子どもたちが並んでいる姿より、さらっと練習している今の姿のほうがゴソゴソしている子どもいなくて姿勢もよく、すっきり立って話もよく聞いていた」といっていました。

つまり、一人ひとりを大事にすることで、集団で活動する時にもより素晴らしい集団ができあがるようです。このことは一人ひとりを大切にする具体的な保育をすることで、結果としてそうした育ちを見せてくれます。つまり、就学に向けて必要な力も結果として育つのです。

学校に入学してから45分間座るために、座る練習をするのではないのです。日々充分に遊びの時間・空間・道具を保障して、様々な遊びを通して体を動かした結果として、体（筋肉）も発達し、無理なく長時間座っていても体をまっすぐに保っていられるようになるようです。

4 自分で考えて行動する姿

今年の夏のことです、私が驚きを持って見た年長児の姿を紹介します。

年長児がホールで運動会の遊戯の練習をしていました。3回目でもまだ途中までだったようですが、とても上手にできていました。「すごいな」と思って見ていたら、担任が「とても上手だったから、ご褒美にリレーやろうか」といいました。その言葉一つで、子どもたちはさくっとリレーをするための順に並び、座って待っている姿になりました。担任が「はい、今からリレーをするのでここに並んでください」といっ

たわけではなく、「ご褒美でリレーやろうか」といっただけです。

保育士の指示によって行動したのではなく、保育士の言葉掛けによってそれぞれが考えて行動し、準備の列が整ってしまったのです。こうした力が、就学に向けての力の一つではないでしょうか。

しかし、あまりに見事で驚いたのですが、完璧というわけではなかったのです。その時、3人ほど窓辺に行って外を見ていた子がいました。保育士はもちろん認識していましたが、声は掛けずにリレーの準備を続けていました。そして、準備が整ったタイミングで、その3人も見事に自分の位置に戻って、スムーズにリレーが行われました。その3人の子は、やはり少し特別な支援が必要な子たちでした。

この一連のことで、保育士の許容範囲の広さと、子どもを信じる姿にまた感動したのです。またここで見せてくれた子どもの姿は、自分で考えて行動し、待つということとです。そして、枠から出ていった3人についても保育士の姿が示しているように、子どもたちも非難することもなく、受け入れつつ、自分は自分のことをするといふ姿を見せてくれたのです。このことは、「インクルーシブ保育」といわれる保育にあたることだと思います。本当に素晴らし

●運動会

- ① 閉会式：最後までちゃんと話を聞いてくれます
- ② 年長児の遊戯：遊戯によって様々な発達を見せてくれます



①

いと思いました。

5 特別な配慮を必要とする子の保育

さて、特別な配慮を必要とする子は私の園でも年々増えているのが現実です。充分な人手を確保することがなかなか難しく、そうした子どもたちへの対応に、保育現場では日々心を砕いているところです。

一人ひとりを大切にする具体的な保育を実践する時の考え方としては、現実には一人ひとりのニーズが実に様々で、発達の状況はやはり専門知識がないと見極めること



②

がとても難しい状況だと思っています。そんな中でも丁寧にかかわることで、やはり驚くほどの発達を見せてくれます。

3歳の時には集団に入るとはとても無理で、保育室の隅でカーテンに隠れていた子が、4歳の時には、運動会の遊戯でその場にいることができるようになり、5歳になった時には、言葉はまだはっきり出ないのですが、とても楽しそうに発表会の劇をする姿を見せてくれました。見ているだけで、こちらも楽しい気持ちになるような演技です。

保育現場では、一筋縄ではいかない個性



●5歳児のわらべうたの課業
5歳児は全員参加です

的な子どももたくさん抱えながら、日々格闘しているのが現実です。ちなみに、配慮の必要な加配保育士として4人を配置することになっていますが、今は1人しか配置できていません。来月には1人が育休に入るので、ついに加配の保育士は1人も配置できない状況になります。それでも現場の保育士は悩みながら、一人ひとりの発達を支えることを大事にして、日々の保育をしています。